

信州大学農学部における国際交流の現状と課題 —2010年2月パネル・ディスカッションから—

平澤真由美・南 峰夫

信州大学農学部 国際交流委員会

要約 高等教育の国際化が進む現代において、日本への外国人留学生の増加が期待されているが、信州大学農学部への留学生は年々減少している。このような現状に鑑み、農学部における留学生を増やし、国際交流を促進するための課題を明らかにすることを目的として、2010年2月にパネル・ディスカッション「信州大学農学部における国際交流の現状と課題」を開催した。ディスカッションには、信州大学農学部外国人卒業生・日本人学生・地元の留学生支援者らが参加し、主に留学生受け入れ態勢の視点から討論した。討論と質問票調査結果から、農学部が提供している留学生支援である無料日本語補講や日本人学生によるチューター制度は有効だと評価されたが、留学生は依然として①金銭的困難、②言葉の壁、③国際交流の希薄さ、に悩んでいることが浮き彫りになった。信州大学農学部における国際交流の現状改善とさらなる発展のためには、①学部内の英語化促進、②大学内外での国際交流活動のコーディネート、が必要であると考えられる。

キーワード：国際化，国際交流，言葉の壁，留学生

1. はじめに

グローバル化が進んだ現代では、高等教育においても教育需要の拡大にともない先進国のトップ大学を中心とした優秀な学生獲得のための世界規模の競争が行われている¹⁾。また、日本国内においては「全入学時代」の到来と国立大学の法人化を経て大学間競争が激化したこともあり、大学の活力の維持・向上と生き残り戦略の一環として大学国際化への組織的な取り組みが重要になってきた²⁾。こうした状況下、1983年の「留学生*10万人計画」の達成に伴い、2008年には文部科学省が新たに「留学生30万人計画」を打ち出し、2020年までに、これを達成するという目標を立てた。経済協力開発機構(OECD)(2010)³⁾によると、2008年における世界中の留学生の総数は約330万人で年々増加傾向にあるが、そのうち日本へ留学するのは約4%の13万人であり、GDPや国際貿易などにおける世界での日本のプレゼンスと比較しても、日本の留学生受け入れが十分ではないことを示している^{4,5)}。留学生の増加のためには、カリキュラムや受け入れ態勢等の改

善が必要であることは明白である⁶⁾。

信州大学は将来構想「信州大学ビジョン2015」⁷⁾において「国際化時代に対応した外国人留学生の受け入れ促進」を宣言し、「信州大学国際化推進プラン」⁸⁾を基に、「国際的な人材育成・人脈形成・異文化理解教育の拠点となる」ことを目指している。農学部でも日頃から留学生支援態勢強化に取り組んでいるが、実際には信州大学全体でも農学部単体でも留学生数は減少傾向にある(図1, 2)。2008年の信州大学外国人留学生対象のニーズ調査¹¹⁾は、2001年の調査¹²⁾以来依然として金銭的困難や疎外感に悩

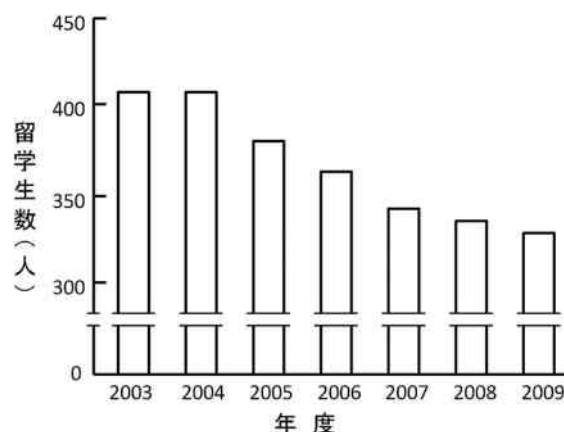


図1 信州大学における外国人留学生在籍者数の推移(2003-2009)⁹⁾

受理日 2010年12月10日

採択日 2011年1月24日

*1本稿での留学生という表記は外国人留学生と同義。

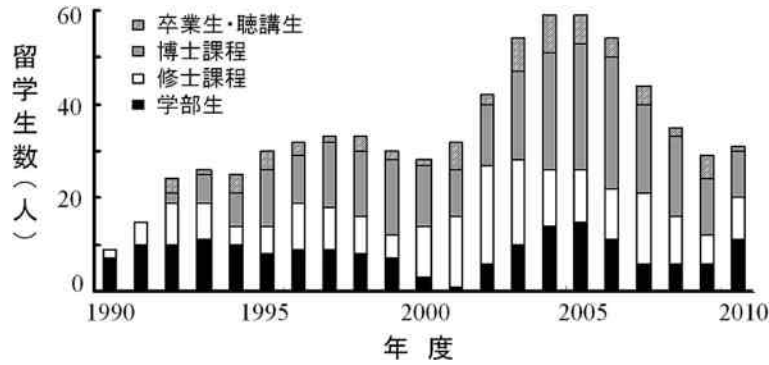


図2 農学部における外国人留学生在籍者数の推移 (1990-2010)¹⁰⁾



写真1 パネル・ディスカッションの様子

む留学生が多いことを浮き彫りにしており、問題を解決しようとする各受け入れ部局の努力と意識改革¹¹⁾が無ければ、留学生の増加は見込めない。

以上の背景と必然性から、信州大学農学部における国際交流の現状と今後への課題を探るために、2010年2月20日にパネル・ディスカッションを開催し、参加者間の情報共有と意見交換、さらに質問票調査を行った(写真1)。

本稿は、信州大学全学部所属の留学生を対象に行われたニーズ調査^{11,12,13,14)}の先行研究を基に、より詳しい質的データから農学部独自の課題点・改善点を明らかにすることを目的とし、さらに、この調査で得た結果を現場へフィードバックし、農学部が組織全体として国際化・国際交流に取り組むことを最終目標とする。

2. 調査方法

過去4回の信州大学の留学生ニーズ調査の結果^{11,12,13,14)}から、留学生の意識はある程度数値化されている。そこで今回は、質的研究として参加者と観察者の双方にアプローチするトライアングュレー

ション法^{*2)}を用い、かつ、連動することにより問題点や解決策が探りやすい以下の2つの方法を採用した。

2.1 フォーカス・グループ・インタビュー (パネル・ディスカッション)

参加者(ここではパネリストとしてのサンプルを指す)の具体的・経験的証拠を集めることを目的とする。

2.1.1 ディスカッション・テーマ

今後期待される留学生増加の手がかりとすべく、①日本および農学部の留学生の傾向、先行研究^{11,12,13,14)}で指摘された②留学生が抱える金銭的困難、③言葉の壁、④国際交流活動、を主なテーマとした。特に佐藤(2009)¹¹⁾が2008年に信州大学の留学生に行ったニーズ調査で、2001年の調査¹²⁾当時と変わらず奨学金などの問題に悩む留学生が多いこと、差別と疎外感を感じている者が存在すること、を指摘した点を重要視し、農学部の現状を探った。

2.1.2 パネリスト(サンプル)抽出

次の属性(2010年2月20日当時)を備えることを理由に、適切と判断された5人を選んだ。

パネリストA: アジア漢字圏・中国出身、信州大学大学院農学研究科修士課程修了後、日本でグローバル企業に就職、幼少期を日本で過ごしたため日本語は第二言語。

パネリストB: ヨーロッパ圏・フィンランド出身、岐阜大学大学院連合農学研究科博士課程(信州大学配置)修了後日本で就職、日本語は上級レベル。

パネリストC: アジア非漢字圏・タイ出身、岐阜大学大学院連合農学研究科博士課程(信州大学配置)

^{*2)} 2つ以上の調査方法や情報源から証拠を得て社会現象を調査し、結果を照合する手法。これにより、情報の偏りによるバイアス(偏見)を排除できる¹⁵⁾。

修了後日本で就職活動中、日本語会話はほぼ支障ないが読み・書きは困難。

パネリストD：日本人学生、信州大学農学部在学中、学生サークル・リーダー、短期海外滞在経験あり、大学寮で留学生・日本人学生と共同生活中。

パネリストE：信州大学農学部留学生支援の会（ロータリークラブ）会員、自営の会社と自宅での外国人研修生受け入れ経験が豊富。

なお、パネル・ディスカッションに先立ち、2010年1月にサンプル全員に対し、①サンプルとしての適性と特異性を確認し、②サンプルと筆者（パネル・ディスカッションにおいては進行係）との間に信頼関係をできるだけ構築し、③ディスカッションでサンプル同士の関連ある発言を引き出しやすくするために、面談または電話による半構造化インタビュー^{*3}を行い、加えて外国人留学生／卒業生であるサンプル（パネリストA, B, C）には質問票調査を行った（資料1）。質問票は和文と英文訳で提供し、回答言語は回答者の選択によった。

2.2 自由記述式質問票調査（アンケート調査）

観察者（ここではパネル・ディスカッションの聴衆を指す）の立場でパネル・ディスカッション参加を通して感じたこと、意見を質問票（資料2）に無記名で記入してもらった。

2.2.1 調査項目

質問項目は、①パネル・ディスカッションの開催の意義とマネジメント、②「国際交流」の個人定義、③信州大学農学部の留学生に期待すること、④農学部における国際交流推進のための提案、を問うものとした。

2.2.2 調査対象者と配布および回収方法

パネル・ディスカッションの参加者約150名に入場時に質問票を配布し、退場時にボックス回収を行った。質問票は24名が提出し、回収率は約16%であった。

なお、質問票回答者の属性を問う設問は無かったが、回答内容から教育関係者や国際交流事業関係者であることが窺える質問票が数票含まれていた。

3. 結果と考察

3.1 日本および信州大学農学部の留学生の傾向

他大学との競争に勝ち、留学生を呼び込むために

は、まずはターゲットの傾向と要求を知り、受け入れ側として自らの魅力と足りない部分を認識する必要がある。

2010年7月1日現在、信州大学には354名の外国人留学生が在籍し、そのうちの31名が農学部で学んでいる。国籍は中国人がほぼ半数で、バングラデシュ、ベトナムの順に続き、アジア圏出身者が約97%を占めており、出身国・地域別傾向はここ数年変わらない（図3）。これは2009年における日本への留学生総数約13万人のうち中国人留学生が約60%、アジア圏からの留学生が全体の約92%を占める⁹⁾傾向とほぼ同じである。中国人留学生の増加傾向は出入国管理が少し緩くなったことによると文部科学省顧問である木村（2010）⁹⁾は分析している。

留学の目的は「学位取得、就職に必要な技能・知識の習得」以外に、「国際的」な経験・人脈づくり・考え方を身につけることにあるが、外国人留学生が日本を留学先に選ぶ主な理由は、「日本での生活に対する憧れ」、「日本語・日本文化の勉強」、「日本の大学等での教育・研究内容」であり¹⁷⁾、外国人パネリスト3人が信州大学農学部を留学先に選んだ理由と同じである。なかでも、ヨーロッパ出身の卒業生パネリストBは、欧米人にとって日本留学の魅力は日本の伝統・文化であると主張し、信州大学農学部が留学生を増やすには、例えば、世界的にもレベルが高い日本の木材文化も一緒に学べることをアピールすれば良いと提案しており、日本人はこのような自分たちの持つ魅力にあまり気づいていないとも指摘している。

日本への憧れが留学先決定の大きな理由だったと

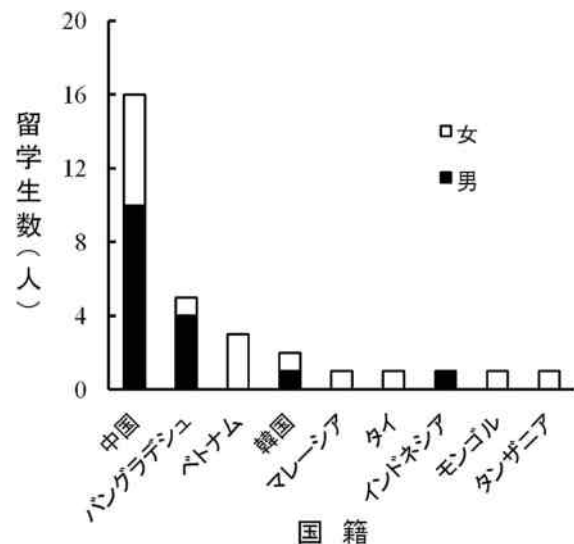


図3 農学部における外国人留学生の国籍別在籍者数¹⁰⁾（2010年7月現在、計31名）

^{*3}ある程度質問内容や順序があらかじめ決められているインタビュー形式¹⁰⁾。

語ったパネリストCはタイ出身である。国費留学生として日本での生活・研究に経済的負担がないと事前に決まっていたこと、さらにタイの母校と信州大学が学術交流協定を結んでいるため便宜が図られやすかったことも信州大学農学部を選んだ理由であると答えている。

アジア圏出身者だけでなく、ヨーロッパからの留学生にとっても、奨学金があることは魅力だとパネリストBも語っており、留学先決定の要因は、「授業料」と「物価」にあるとのOECDの分析³⁾に加え、ヨーロッパに比べて日本は大学授業料が高く、学生支援態勢が比較的整備されていない国のひとつである²⁾と指摘されていることから、留学生に金銭的負担をできるだけ感じさせないような受け入れ態勢および学生支援システムを作ることが留学生の増加に繋がると考えられる。

3.2 留学生が抱える金銭的困難

いざ来日して大学で学び始めると、今度はアルバイトと学業が両立できないといった困難にぶつかる留学生は多い。2009年5月現在、日本で学ぶ約13万人の留学生のうち約90%が私費留学生である¹⁷⁾。信州大学には、修士および博士課程入学前に来日し受験準備をする「研究生」という非正規生がいるが、正規生でないため奨学金は得られない。正規生になって奨学金に応募し、得ることができる留学生は信州大学全体で2008年では約42%であり、そのため、70%近い留学生はアルバイトをしていた¹¹⁾。農学部においても奨学金受給者は2010年で約52%であり(表1)、多くの留学生がアルバイトをしており、学業とアルバイトを両立させることが難しかったとパネリストCは苦労を語った。

中国出身のパネリストAも、中国と日本の物価の違いと、親からの援助を受けることに抵抗があるという祖国の文化的背景を説明し、中国からの仕送りだけでは日本で生活するのが困難であること、そのためアルバイトをせずに勉強に専念することが難しい、と中国人留学生の苦しい実情を訴えた。こうした現状をふまえ、信州大学農学部留学生支援の会メ

ンバーであるパネリストEは、引き続き留学生に奨学金を通じて経済的支援をすることは勿論、支援の会メンバーの多くが事業主であることから、アルバイト先のコーディネーター、車を持たない留学生にはその際の送り迎えなど、できるだけ便宜を図りたいと述べた。

3.3 言葉の壁

学業面はもちろん、生活費を稼ぐためのアルバイト探しや卒業後の進路にも「言葉の壁」は立ちほだかる。多くの留学生は日本語能力に何らかの問題がある¹⁸⁾ため、信州大学は農学部も含めて留学生支援として無料で日本語補講を提供している。来日前は全く日本語能力がなかったパネリストCは、日本語はもちろん、日本文化や留学生があまりわからないルールも学ぶことができた、と日本語補講を高く評価している。

中村(2001)¹⁸⁾による2000年に行われた信州大学農学部外国人留学生の日本語能力に関する調査は、留学生の日本語能力は不十分だが「日本語の勉強にきているわけではないので仕方がない」とし、英語ができれば「研究においては特に問題なし」と考える指導教員もいることを浮き彫りにした。しかし、英語ができれば日本語ができなくても良いかという点、実際には大学内の環境は「英語だけで済まされない」¹⁸⁾。本学を含め日本の大学では、掲示物、事務手続き、授業などは基本的に日本語使用であるからである。

ヨーロッパ圏出身で英語も習得しているパネリストBは、入学当初は英語を使っていたが、日本語を使えるようになりたいとの思いもあり、ディスカッションは日本語で行うようになったと自身の経験を語った。それでも論文は日本以外でも読んでもらうために英語で書くべきだと主張した。これに対し聴衆からも活発に意見が出され、アメリカの大学で教鞭をとっていた聴衆のひとり、大学というアカデミックな環境ではアメリカに限らず英語が「共通語」であり、日本の大学においても英語を第一にするのが良いと提案した。信州大学の元学長は、授業

表1 農学部における外国人留学生の奨学金等受給状況 (2010年7月現在)¹⁰⁾

留学生在籍者数 (人)	奨学金受給者数 (人)			
	国費・政府派遣等	学習奨励費	民間財団等	計
31	6	1	9	16
(%)	(19.4)	(3.2)	(29.0)	(51.6)

はできるだけ英語でして欲しいと全学部に働きかけていたと発言し、信州大学農学部長も、世界へ向けて情報発信をするためには英語の力をつけて欲しいと、農学部における国際化のための英語化の必要性を示唆した。

アメリカでの指導経験がある前出の参加者は、パネル・ディスカッションでいろいろな立場の人たちの意見を聴いた後、質問票調査を通して、大学院レベルの学習・研究において言葉の壁をできるだけ低くする柔軟性を持った留学生指導方法を導入することが、各国との留学生獲得競争に勝つために必須であると指摘した。また、それにより教育組織としての農学部の国際化が進むとともに、農学部出身者の国際性が涵養され、国際的な交流とキャリアも広がることから、こうした言語面での柔軟性を持てば、留学生の数も、信州大学農学部の国際的知名度も増すのではないかと包括的な意見を寄せた。

3.4 チューター制度の有効性

言葉の壁を補うために、信州大学はチューター制度を取り入れ、日本人学生が外国人留学生に対して学習・生活面のサポートを、学士課程では入学後最初の2年間、修士・博士課程では1年間行っている。特に、来日間もない留学生の各機関での手続きや生活を始める際の入居サポートなど、チューターの果たす役割は大きい。中村(2001)¹⁸⁾の行った2000年の信州大学農学部外国人留学生へのインタビュー調査は、彼らが日本語教育を受けるにあたり、個別指導やコンサルティングを望んでいることを示しており、2010年10月の農学部日本人チューター14人の実施報告書においても、11人(78.6%)のチューターが留学生の要望に応える形で、普段から日本語指導・補助をしていることが報告されている。つまり、チューター制度は留学生の言葉の壁を取り除くことに貢献していると考えられる。パネリストCもチューター制度を利用したことにより、チューターを介してより多くの日本人学生と友好関係を作るきっかけにもなったと、チューター制度の効果を高く評価している。

ここで注目すべきは、チューター制度は留学生だけに有益なのではなく、日本人学生に国際交流や海外留学に興味を持たせ、グローバル人材に育てることも目的としていることである。しかし、日本人学生のパネリストDは、留学生と関わってみたいと思っている日本人学生は大勢いると思うが、チューター制度について自分自身は知らなかったし、日本人

学生と留学生が一緒に何かをやっているということを見聞きすることがあまりなかったと述べ、チューター制度が日本人学生には広く知られておらず、彼らの国際性を養う機会としては限られた人にしかそのチャンスが与えられていない現状を指摘した。

3.5 国際交流活動

農学部在籍中の交流の実情について、外国人パネリスト達は自分が所属する研究室の指導教員や日本人学生たちとは交流があり、必要なサポートを受けることができたが、研究室以外では日本人学生や地元住民との接点がほとんどなく、国際交流の機会が少なく感じていると述べた。パネリストDは、自分達日本人学生が留学生を巻き込んで地域貢献をし、相互関係を作ることで「お互いに居て欲しい存在」になることができると良いと述べ、さらに、「何かをして欲しい」という前に、「私に何ができるだろう。自分に提供できるものがあるか。」ということを一先度全員が考えてみる必要があると訴えた。

「国際社会全体が平和で調和ある発展を図っていく」ために国際交流は必要であり、教育・学術分野における国際交流は「それぞれの分野の発展に資するばかりでなく、人と人との交流として相互理解を促進し、真の友好関係を築いていくうえで重要な意義」を有している¹⁹⁾。かつて信州大学農学部の留学生であったパネリストたちにとって、小学校との交流プログラムや地元住民との交流に参加したことは良い思い出であり、ストレスが多い留学生生活を乗り切るためにもこうした国際交流活動は留学生にとって大切だと語った。また、彼らだけでなくパネル・ディスカッションに参加した伊那市教育関係者や独立行政法人国際協力機構職員も、相互の文化はもちろん国際理解推進のためにも信州大学農学部の留学生が参加する国際交流の機会を増やして欲しいと発言した。

国際交流には「その国の言葉と文化を理解するよう努めることが重要だ」との意見が外国人パネリストBと外国人支援を続けるパネリストEから出された。一方、言語能力にかかわらず、まずは「相手に話しかけること・相手に通じるように話すこと」がコミュニケーションの始まりであると、ある聴衆は交流のきっかけ作りの大切さを訴えた。

このように活発な意見交換がなされたパネル・ディスカッションを終え、回収された質問票を集計すると、過半数の聴衆が留学生に対して同じ思いを抱いてディスカッションに参加していたことが明らか

となった。それは、「学業を修めることはもちろん、それ以外にも地元との交流に積極的に参加して日本文化の理解に努め、卒業後は自国の人々の日本文化への理解や平和的関係の促進に尽力して欲しい」というものであり、まさに「国際社会全体の平和で調和ある発展」のために信州大学農学部留学生が期待されていることを示すものであった。

4. 今後への課題

今回の調査を通じて、信州大学農学部における国際交流はまだ十分とは言い難いことが明らかになった。一方で、パネル・ディスカッションに参加し質問票に答えた人の半数（24人中12人）が「国際交流は今後の日本人に必要なテーマである」と述べていることから、今回のような多種多様な人々との意見交換・情報共有の機会を信州大学農学部が設けたことは、国際交流活動のひとつとして評価されたと考える。

国際化が進む現代の日本社会においては、教育現場にも国際化のプレッシャーがかかっている。信州大学農学部における国際交流の現状に対し、今回の調査で得られた今後への課題は次の通りである。これらを現場へフィードバックし、早期に検討・対応を図ることが望ましい。

4.1 国際化を進めるための学部内英語化（多言語化）の促進

国際化の重要性とその全学的な推進の必要性が多く大学の認識され、「英語による科目・プログラムの開設」、「学内文書・情報提供の多言語化」が大学の国際化には必至であると言われている²⁰⁾。信州大学には国際化に向けた教育プログラム整備として英語カリキュラムを備えている学部もあるが、農学部ではまだ完全に整備されていない。パネル・ディスカッションでは大学内での英語使用を促進すべきとの意見が出され、質問票調査の回答でも受け入れ側の英語力の問題を解決する必要があると指摘された。こうした大学国際化要求に応えるためには、農学部において①インターナショナル・コースの設置、②国際交流事業を担当する専任教職員の配置（特に、外国人留学生に女性が多いことから、女性教職員の増員と留学生に対するケアの質の向上）、が必要であり、留学生獲得戦略として重要である。

4.2 大学内外での国際交流活動のコーディネート

せっかく日本語が使えるようになっても、実際に日本人と満足な「交流」があると感じている留学生は少なく、彼らはより多くの交流の機会を望んでいる。そのため、日本人学生と外国人学生のための交流ルームの設置も農学部における国際交流活動を促進するために必要と考えられる。また、今回の調査から、留学生だけでなく学外の地元団体・住民も国際交流の機会を持ちたいと考えており、信州大学農学部がそれぞれを繋ぐコーディネーターになるよう期待されていることが明らかになった。「信州大学農学部には30人余もの外国人留学生がいることを知らなかった」、「今回のパネル・ディスカッションのように一般の地元住民が大学内で交流を持つ機会は貴重」との声が質問票を介して寄せられており、国際交流に関わる広報活動がまだ不十分であると考えられる。地元団体・住民からの奨学金や支援は、信州大学農学部や留学生に対する理解や信頼から得られるものであり、それらは学内外での交流活動を通じて培われるものであることを忘れてはならない。

謝 辞

本稿の執筆にあたり、パネル・ディスカッションで貴重なご意見を述べてくださり、掲載を快く許諾して下さったパネリストの方々、日頃から信州大学農学部にご協力くださり、ディスカッションにも参加して下さった留学生支援の会の皆様、地元の方々はこの場を借りて心より感謝申し上げます。さらに、パネル・ディスカッション開催にあたりご尽力いただいた信州大学農学部国際交流担当の桑原範行主査ならびに関係各位に謝意を表する。

引用文献

- 1) 太田 浩. アジアの外国人留学生政策と諸課題：シンガポールと韓国を事例に. アジア研究. 54：26-43. 2008
- 2) 独立行政法人日本学術振興会 (JSPS). 大学国際戦略本部強化事業（研究環境国際化の手法開発）：大学の優れた国際展開モデルについて（中間報告書）.
<http://www.jsps.go.jp/j-bilat/u-kokusen/program/org/interimreport/gaiyou.pdf>. 2007.
- 3) 経済協力開発機構 (OECD). Education at a Glance 2010: OECD Indicators.
<http://www.oecd.org/dataoecd/45/39/45926093.pdf>. 2010.
- 4) 三上喜貴. アジア留学生の長期動態：その留学国

- 選抜. 長岡技術科学大学研究報告. 20:111-117. 1999.
- 5) 木村 孟. 「留学生30万人計画」の目指すところ. 平成21年度留学生交流総合推進会議. 国立オリンピック記念青少年総合センター. 2010年2月8日.
- 6) 文部科学省. 国立大学法人化後の現状と課題について (中間まとめ).
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/22/07/_icsFiles/afieldfile/2010/07/15/1295787_3.pdf. 2010.
- 7) 信州大学. ビジョン2015.
<http://www.shinshu-u.ac.jp/guidance/philosophy/vision.html>. 2008.
- 8) 信州大学. 国際化推進プラン.
<http://suhost16.shinshu-u.ac.jp/guidance/pdf/kokusai-suishin.pdf>. 2009.
- 9) 信州大学国際交流センター. 信州大学における外国人留学生在籍者数の推移 (2003年-2009年). 2009.
- 10) 信州大学農学部国際交流委員会. 信州大学農学部留学生データ. 2010.
- 11) 佐藤友則. 第4回信州大学の留学生のニーズ調査—2008年11・12月調査において—.
http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/suic/upload/pdf/publications/ekiyou_1.pdf. 2009.
- 12) 佐藤友則・秋庭裕子. 第3回信州大学の留学生のニーズ調査—2001年11・12月調査において—. 信州大学留学生センター紀要. 3:95-109. 2002.
- 13) 佐藤友則・秋庭裕子. 第1回信州大学の留学生のニーズ調査—1999年10・11月調査において—. 信州大学留学生センター紀要. 1:75-85. 2000.
- 14) 佐藤友則・秋庭裕子. 第2回信州大学の留学生のニーズ調査—2000年11・12月調査において—. 信州大学留学生センター紀要. 2:91-102. 2001.
- 15) Bryman. A. *Social Research Methods*. 2nd ed.. Oxford University Press. 2004.
- 16) 盛山和夫. *社会調査法入門*. 有斐閣. 2004.
- 17) 独立行政法人日本学生支援機構 (JASSO). 平成21年度私費外国人留学生生活実態調査.
<http://www.jasso.go.jp/scholarship/documents/ryuichosa21p00.pdf>. 2010.
- 18) 中村純子. 農学系留学生の言語使用. 信州大学留学生センター紀要. 2:79-90. 2001.
- 19) 国際交流実務研究会. *国際交流実務ハンドブック I. ぎょうせい*. 1992.
- 20) 独立行政法人日本学術振興会 (JSPS). 研究環境国際化の手法開発 (大学国際戦略本部強化事業) 最終報告書: グローバル社会における大学の国際展開について～日本の大学の国際化を推進するための提言～.
http://www.jsps.go.jp/j-bilat/u-kokusen/program_org/finalreport/finalreport.pdf. 2010.

Current Situation and Challenge of International Exchange at the Faculty of Agriculture, Shinshu University : Panel Discussion and Feedback from Audience - February 2010

Mayumi HIRASAWA and Mineo MINAMI

International Exchange Committee, Faculty of Agriculture, Shinshu University

Summary

Amidst the progression of internationalization, Japan expects an increase in the number of international students although the number of international students in the Faculty of Agriculture at Shinshu University has been decreasing. The Faculty held a panel discussion and conducted a survey of international students/graduates, a Japanese student of the Faculty, and local people in order to find the problems that international students tend to face and their possible solutions. Since language barrier limits international students' communication with Japanese students and local people, it is suggested that the Faculty should become a bridge between international students and Japanese people through international exchange and that internationalization of academic language on campus is inevitable.

Key word : language barrier, international exchange, international student, internationalization


資料1 外国人留学生パネリストへの質問票





Faculty of Agriculture
Graduate School of Agriculture
Interdisciplinary Graduate School of Science and Technology
8304 Minamiminowa, Nagano, 399-4598, JAPAN
<http://www.shinshu-u.ac.jp/>


私の学生生活

名前: (フリガナ)
(ローマ字) _____
専攻: _____ 学科 (○で囲む) 学部/修士/博士/研究生
担当教官: _____
在籍年数: _____

-  どうして信州大学農学部を選んだか
(講義内容が魅力的、知人の紹介、など)

-  南箕輪と農学部の魅力
(先生やスタッフが助けてくれる、地元の人が親切、環境が素晴らしい、など)

-  日本で学ぼうと努めていること一言の問題や文化の違いをどうやって克服しているか
(先生や研究室の仲間に助けを求め、他の留学生と一緒に出かける、学校のスタッフに相談する、など)

-  「日本」の「信州大学農学部」で学んだことは、自分にとってどのような意味があるか
(将来どのような仕事がしたいか、ここでの経験をどう生かしたいか、どう社会貢献できるか、など)

資料2 パネル・ディスカッション参加者への質問票

Shinshu University International Symposium 2010

信州大学国際シンポジウム 2010

アジアネットワークの発展をめざして
—農学部における国際交流の現状と課題—

本日はパネル・ディスカッションにご参加くださり有難うございます。
農学部における留学生支援体制改善のためにご意見をいただければ幸いです。

- 1 今回のパネル・ディスカッションはいかがでしたか。
 - * テーマについて
 - * パネリストについて
 - * 進行について
 - * その他

- 2 「国際交流」とはどのようなものだとお考えですか。

- 3 信州大学農学部の留学生に期待することをお書きください。

- 4 信州大学農学部における国際交流を促進するために改善すべき点をお書きください。

- 5 その他、お気づきの点などお書きください。

有難うございました。 今後ともよろしくお願い申し上げます。
信州大学農学部 (2010. 2. 20)